

連載 亀ちゃんにも言わせてよ！

若者が育つ場はあるの？

気になる記事から

この原稿を書くまで今月は別のテーマについて書こうと思いついて準備していましたが、書き終わらないまま原稿締め切り日になり「どうしよう」と思いつつ、なぜか新聞を開いていたのですが（編集部の人ごめんなさい）、読んでみると次のような見出しが目につきました。「新入社員もダウン寸前 即戦力でいきなり深夜・休日出勤」とあったのです（朝日新聞7月1日付朝刊の「暮らし」の面です）。見出しにつづいて「学校を卒業して会社に入ると、しばらくじっくり仕事を学ぶ。そんなのどかな時代は過ぎ去ったのかもしれませんが。…」という文が目に入ったとき「その通りだな」と思いました。この記事自体の視点は、そこにある言葉「過労社会」・「長時間労働」・「仕事人が人を殺す」からも察せられますように、若者を取り巻く労働環境が過酷なものになっていることをとりあげるものです。

少し違った見方ですが、私が気になったのは上述の一文でした。「学校を卒業して会社に入ると、しばらくじっくり仕事を学ぶ。」この文の意味が気になったのは私だけでしょうか。今回は、「その通りだな」と思ったことについて少々「言わせて」ください。

学校は即戦力養成所？

私は以前から（おそらく子どもの頃から）仕事は仕事のなかで（現場で）憶えて、要領や立ち居振る舞いなどのその仕事に必要なことを身につけるものと思っていました。ところが、今の世の中、現実にはどの職場も「即戦力」を欲しがり、人材育成を行おうとするところは少なくなっているのではないのでしょうか。私事ですが、学生の頃（だいぶ前ですが）新しく入ったアルバイト先で「はじめての仕事です。いろいろと教えていただきたいのでよろしくお願いします。」と挨拶したら、「同じ金で雇われているのに迷惑だな。学校じゃねえんだよ、同じ働きができないならやめてくれ。」と、40才くらいの人から言われたことがありました。そのときは、きついことを言う人だなと思いつつ、その人の言うことも一理はあるかもしれないと思っていました。しかし、今考えてみると、それでは学校は仕事で使える即戦力を養成するところなのではないのでしょうか。上述の新聞記事にあったように、企業が即戦力を求めているとしたならば、その企業の経営者や人事担当者は若者がどこで企業の戦力として育てられていると考えているのでしょうか。専門学校は別として、高校や大学は仕事のためにあるのでしょうか。昨今の教育関連議論（教育基本法改正・国立大学の独立行政法人化・法科大学院等の専門大学院など）で学校が何のためにあるのか真剣に検討されているのでしょうか。私は学校＝養成所・訓練所とは思いません。学校は仕事を育てるところではなく、「人」を育てるところではないのでしょうか。みなさんはどう思いますか。

資格は即戦力の証？

資格試験が最近もてはやされています。大別すると、資格試験はあるレベルに達していることを審査するもの（英検など）と、ある業務に必要な知識を審査するもの（免許など）に分けることができます。いずれにしても、資格はその人が資格に証されている技能についてあるレベルに達していることを認めるものです。しかし、あくまでも証明されていることは、そこに書かれている技能についてです。たとえば、英検1級の人には確かに英会話には困らないと思いますが、英会話能力だけでどんな職場でも即戦力と言えるのでしょうか。また、医師免許を取得したからといって、その日から何十年も経験を積んだ医師と同等の力量を持ったと言えるのでしょうか。言えませんよね。実際の仕事現場では一つの技

能だけで足りるというものではなく、また、何が起るかわかりません。それをすべて想定して事前に学ぶことは不可能です。けっきょく、資格取得＝即戦力ではなく、資格はある「一技能」のレベルを証するか、ある業務に「必要な最低限」の知識や技能を証するものでしかないのです。

育てないのか育てられないのか

学校は仕事人を育てるところではないし、専門学校等に通って資格を取得したからといって即戦力と言うこともできない。かりに、プロフェッショナルを養成する機関を設けても資格試験の問題と同じく各現場で起きるすべてのことを想定して教えることはできません。けっきょく、実際の仕事のなかでしか仕事を身につけることはできないのです。それなのになぜ即戦力を欲しがるのでしょうか。人材を育てるのには時間とお金がかかります。経済効率から言えば育てるより育った者を採用した方がよいということでしょう。そうすると、上述のように若者はいかなる資格を持っていようといかなる学校を卒業していようと即戦力といえませんから、経験者を採用することになります。現在はそれでもよいのかもかもしれませんが、長い目で見てください。次世代を担う若者を育てなければ、いずれ経験者はいなくなります。そのとき社会はどうなるのでしょうか。ところで、一つの疑問が私の頭のなかにあります。それは、社会が若者を育てないだけでなく、いつのまにか育てられなくなっているのではないかということです。何となく肌で感じていることなのですが、どう思いますか。

わかりにくくて、ごめんなさい

今回は確たる疑問があるというよりも、何となく感じていることをそのまま書いたので読者の方にはわかりにくいものになってしまいました。ただ、どうしてもみなさんに伝えなかったことは、社会全体が若者を育てない、つまり若者の失敗に不寛容・育成の放棄になっていることが、少年非行の背景にある問題と同根ではないかと感じていることです。若者が育つ場がないということは、社会に若者の居場所（成長しながら自分を表現する場）がないと言い換えることもできませんか。

先の少年法改正時には子ども・若者（青年層）を取り巻く大人社会の状況についてはきちんとした議論がなく、子どもだけがおかしくなっているかのような議論の進め方がなされていました。目前に改正後の見直し時期が迫っています。そのさいには、人を育てることを社会全体で考えたうえで少年問題について議論していただきたいと思います。

動物園で生まれ育った動物（ゴリラだったかな）が子育てできないで飼育係の人が子どもの面倒を見ている話を以前テレビ番組で見ました。もし、人間社会が次世代（子ども・若者）を育てられない社会になったら、宇宙から飼育係がUFOに乗って来てくれるのでしょうか？

亀山憲一 [会員・フリーで活動中の法学研究者（犯罪学・刑事法）]